

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

# 大津 歴博 だより

— 特集 —

2005  
No.59

## 山ノ神遺跡

※表紙写真の解説は6ページ



山ノ神遺跡跡出土鷗尾 大津市蔵



大津市歴史博物館

大津の遺跡シリーズ4

山ノ神遺跡

7月12日(火)～9月11日(日)

山ノ神遺跡は瀬田丘陵における古代生産遺跡のひとつで、大津市一里山三・五丁目にあります。

これまでの発掘調査により、窯跡四基とそれに伴う失敗品や灰などを捨てた灰原、土器生産の工房跡と考えられる竪穴建物や掘立柱建物などが発見されています。

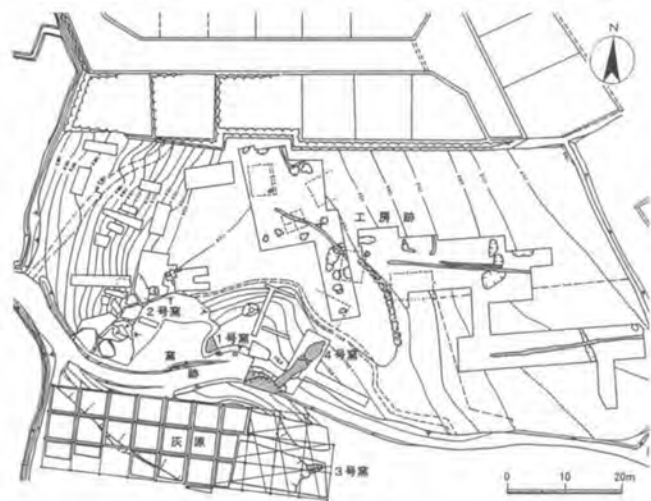
窯跡のうち三基(一・二・三号窯)は須恵器と呼ばれる焼き物を専門に焼いた窯で、残りの一基(四号窯)は初め須恵器を焼き、後に鴟尾を焼いていました。鴟尾とは寺院や宮殿の屋根の大棟の両端を飾る瓦です。

一号窯は後世の大きな削平を受け、焼成部がわずかに残っているだけでした。窯は残存長三・六m、最大幅二・三mを測る半地下式の竈窯で、三回の操作が行われていたことが確認されました。最終操作時の床面には多くの須恵器が置き去りにされていました。

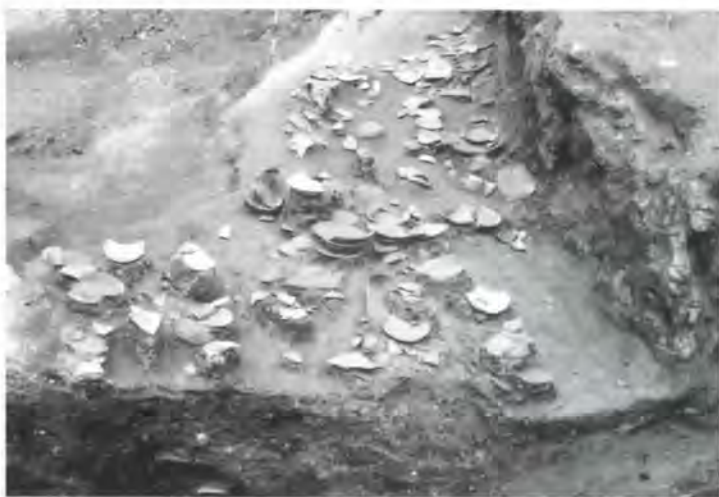
二号窯はすでに破壊され、窯本体は全く検出されませんでした。しかしながら、窯の前庭部の落ち込みと灰原が検出されたことから、その上方に窯が存在したと考えられています。

三号窯は地山をくり抜いた地下式の竈窯で、一号窯と同様に後世の削平を受け、焼成部の大半は消失していましたが、焚口から燃焼部については残っていました。かなりの削平を受けたにもかかわらず、天井の一部が奇跡的に残っており、創業時の床面から天井までの高さが1mで、その横断面は正円に近い楕円形であることがわかりました。操作は少なくとも三回行われ、最終操作時の床面には陶棺底部の破片が残っていました。

四号窯は初め須恵器焼成の窯(四号窯(古))、後に鴟尾焼成の窯(四号窯(新))に造り替えら



山ノ神遺跡遺構配置図



一号窯床面遺物出土状況

れていました。四号窯(古)は全長約一四mの地下式の竈窯で、焚口・燃焼部幅約一・四m、焼成部幅推定約一・六m、煙り出し径〇・四mを測ります。ある時期、窯の後ろ半分の天井が崩落し、操作が中断されたようです。この崩壊によって床面に取り残された須恵器から、山ノ神遺跡で最も古い七世紀中頃の窯であることが判明しました。

四号窯(新)は、四号窯(古)の前半部約九・五mを再利用して造られています。この窯も四号窯



四号窯全景

(古)と同様、焼成中に天井が崩落したため、焼成中の鴟尾四基が窯詰め状態の状態で放置されていた。

した遺物から七世紀の中頃から後半に限定され、特に大津宮時代に(六六七〜六七二年)多量の製品が生産されることから、天智天皇の大津宮との深い関係が指摘されています。

次に、山ノ神遺跡で製作されていた須恵器について見てみます。

須恵器とは、古墳時代から平安時代にかけて製作された灰色をした硬質の土器で、五世紀初め頃に朝鮮半島南部から技術者が渡来して生産が開始されたと考えられています。これまでわが国で製作されていた縄文土器・弥生土器・土師器との大

きな違いは、ロクロの使用と窯による焼成にあります。ロクロが使用されることにより製品の大量生産と製品の規格化が可能になりました。また、これまでの土器は、野焼きによる八〇〇度前後の温度の酸化焔で焼かれ、土器の色は赤褐色をしています。これに対して須恵器は山の斜面に造られた窯で、一一〇〇度以上の還元焔で焼かれます。

そのため、灰色の硬い土器に仕上がっています。山ノ神遺跡で製作された須恵器には、杯、高杯、碗、皿、盤、長頸壺、短頸壺、横瓶、平瓶、甕、甗、台付鉢、すり鉢、甗、硯、陶棺、土鈴、土馬、土錘などの多種多様なものがあり、大規模な生産工場であったと考えられます。

今回のミニ企画展では、このような古代近江の一大生産地であった山ノ神遺跡の出土資料について紹介します。

〔関連講座〕

七月三十日(土)

「鴟尾学入門」

大脇 潔氏(近畿大学文学部教授)

八月二十七日(土)

「調べてびっくり!窯の中から4基の鴟尾発見」

田中 久雄(歴史博物館文化財保護課主査)

九月三日(土)

「古代近江の生産遺跡を探る」

小竹森直子(県文化財保護協会主任)

# 長崎原爆展

主催：大津市・長崎市・財長崎平和推進協会

■8月13日(土)～8月21日(日)

長崎市では、日頃原爆の問題についてふれる機会が少ない他県の方々、特に戦争を知らない世代に被爆の実相や核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを再認識していただくため、平成六年度から開催都市と共催で原爆展を行っており、今年は、大津市歴史博物館を開場として開催します。

会場内には、被爆資料を約三〇点、被爆写真のポスターやパネルを、約一〇〇点展示し、ビデオコーナーでは被爆関連のビデオを上映いたします。また、被爆関連の図書の閲覧コーナーでは、自由に本を読んでもいただけます。約五〇冊のうち、半数程度は児童書です。

今年には終戦六〇周年、戦争を知らない世代の人が大多数を占める時代になりました。しかし、地球上では戦争や内紛が絶えません。非常に多くの核兵器が今でも存在しています。日本は唯一の原子爆弾による被爆国です。日本を最後の被爆国に、長崎を最後の被爆地に、そして、地球上から核兵器を廃絶し、世界恒久平和の実現を、これが長崎市民の願いです。この展示で平和の尊さを再度考えてみてください。

(問合せ先 大津市総務部総務課 〇七七一五二八二二七二〇)



マリア像

熱線が当たった部分が黒く変色している。

## 第50回三二企画展

# 大津祭の装飾品2

■9月13日(火)～11月6日(日)

大津祭は、今から四〇〇年ほど前の慶長年間、旧鍛冶屋町の塩売治兵衛が狸の面をかぶって踊ったことに始まるとされています。そして、寛永十五年(一六三八)に、三輪の台車に屋台造りという曳山の原形が登場し、安永五年には十四基の曳山が出揃いました。その後、曳山は大津町人の豊かな経済

力と高い文化に支えられ、より華麗に装飾されていきました。特に、見送幕などの染色品は、ヨーロッパの毛織織をはじめ、中国・日本の綴織・刺繍など、当時の染色の技術を知るうえにおいても、貴重な品となっています。近年、曳山を彩るこれらの装飾品は、盛んに復元新調が行なわれています。本展では、昨年に引き続き、新調される以前に使用されていた幕類を中心に、曳山のかざりを紹介します。



西宮蛭子山水引 「花鳥文」銀地ピロード刺繍

江戸時代・18世紀後期 白玉会蔵

コンコンチキチンコンチキチン・・・お隣の京都では、祇園祭の季節になりました。蒸し暑くなると食中毒やら何やら、悪い細菌やウィルスによる気につけなければなりません、もともと祇園祭は疫病を防ぐためのお祭りだったことはご存知でしょうか。今回は古代の人々が、病気の原因をどのように考えていたのかについて紹介しましょう。

現代では医学が発展して、科学的な方法で病気の原因を解明し治療することができます。しかし、そのような知識を持つことができない時代では、病気とは突然襲ってくる、不条理、不可解なもので、その原因は人知を超えた存在がもたらす災厄としか考えようがありませんでした。

【令義解】神祇令第六 季春鎮花祭条

季春鎮花祭 謂。大神狹井二祭也。在 春花飛散之時。疫神分

散而行癘。為其鎮遏。必有此祭。故曰「鎮花」。

これは中国に倣って制定された古代の基本法典である律令の公的注釈書「令義解」の一文です。神祇令は天皇の即位儀礼をはじめ、朝廷で行う宗教行事について定めたもので、この条文では春に鎮花祭を行う事と規定しています。本文下の割注には、大和の大神神社と狹井神社において、春、花（桜）が飛散する時になると、疫神が（花に乗って）分散して癘（＝疫病）を流行させるので、それを鎮めるために必ずこの祭りをおこなうものと記されています。古代において、疫病は疫神という人知を超えた存在が引き起こすものと考えられていたのです。そして特に大勢の人々が死んでしまう恐ろしい疫病に対しては、国の行事として朝廷が疫神を祭り、その発生を防ごうとしていたのです。律令を探すと鎮花祭に限らず他にもこうした条文を見つけることができます。

【令義解】神祇令第六 季夏道饗祭条

季夏道饗祭 謂。卜部等於京城四隅道上而祭之。言欲令「鬼魅

自外来者。不敢入京師。故預迎於道而饗遏也。

こちらは夏に道饗祭を行うことを定めており、割注には朝廷の祭祀をつかさどる卜部氏らが、京城（都）に入る道の途中で「鬼魅」「外より来る者」が京師（都）に入らぬよう、饗応し遮る祭りだったと記されています。この記述については異論もあるようですが、ここから病気をもたらす疫神は都の外からやってくるもので、それを都に入るまでに上手にもてなすことにより、恐ろしいあらゆる力を發揮させることなく送り返すことができると考えられていたと知ることができます。

疫神はまるで人間のように道を歩いてやってきて災厄をもたらす。その道の途上でこれを防ぐという方法は「道切」とよばれる風習にも残っています。村境に注連縄で結界を張ったり、お寺や神社の門に大きな草履やわらじを吊って巨大で強い神がいるように思わせ疫神などの侵入を防ごうとするものです。鎮花祭で祭られる狹井神社をはじめ、幸神社という神社を時おり見かけますが、これは悪いものの侵入を防ぐという「塞の神」の意味で、川のほとりなど村境となる場所に祭られていることが多くあります。

最後に祇園祭が疫神祭だったことについて簡単に触れておきましょう。祇園祭は祇園感神院に祭られる牛頭天王を奉祀する祭りです。牛頭天王は謎の多い、インドから伝来した神様ですが、疫神として信仰されていたことを示す次のような伝説があります。

天王が南海へ向かう旅の途中のことです。日が暮れて裕福な巨旦将来に一夜の宿を請いましたが巨旦はこれを断ります。しかし、巨旦の兄弟で貧しい蘇民将来は天王を迎え入れ、粟飯を炊いてもてなしました。天王は旅の帰途、蘇民の家に立ち寄り、その子孫は疫病の災いから守ろうと約束し、巨旦は一族もろともこれを滅ぼしてしまいました。以後、茅の輪などを作り蘇民将来の子孫と書いた札を持てば疫病を免れるといわれるようになったとされます。

（山崎 和宏）

### 山ノ神遺跡出土の鴟尾しび

白鳳時代 大津市蔵

山ノ神遺跡は、大津市の東部、瀬田の丘陵地（一里山三・五丁目）にあり、これまで大津市教育委員会が行った発掘調査で、須恵器や鴟尾を焼いた窯跡四基（一〜四号窯）と、工房跡と考えられている竪穴建物跡や掘立柱建物跡などの遺構（七世紀中頃〜後半）が見つかっています。

鴟尾は四号（新）窯から出土しました。四号窯（新）は四号窯（一号窯と三号窯のほぼ中間に位置）が廃棄された後、少し時期をおいて、窯の前半部分を、新たに鴟尾を焼く専用の窯（全長約九・五m）として造りかえたもので、焼成途中で窯の天井が崩壊したため、窯詰めの状態のままで鴟尾が四基残されていました。いずれの鴟尾も角材をはしご状に組んだ製作台（木材はいずれも炭化した状態で出土）に乗った状態で見つかっており、このような状況で四基もの鴟尾が一度に出土したのは、全国的に見てもたいへん珍しく、貴重な資料といえます。

そこで、大津市教育委員会では、より多くの人々に見ていただけるように、出土した四基の鴟尾を平成十六年度から順次復原するこ

とになり、初年度で、窯の焚口に最も近いところに置かれていた鴟尾一基を復原しました。鴟尾は焼成途中で窯の天井が崩壊し、完全に焼かれていないため、表面の傷みが激しく、そのままでは復原できないことが判明し、薬品で保存処理を施した後、復原を行いました。その結果、鴟尾の大きさは、高さが一三七㎝、長さ（奥行）が一〇〇㎝、幅が六〇㎝、重さが一六三kgとなり、このようにもあつた形に完全に復原できたのは、全国で初めてといつてよいでしょう。

鴟尾は、胴部両側に逆U字形の透かしを入れ、鱗部や胴部を貼り付け突帯や連珠で飾り、頂部に小さな穴がつけられた小型突起（高さ約一〇㎝）が付くという特徴をもっています。なかでも頂部の突起は、これまで全国で出土したいずれの鴟尾（三百基近い）にも類例がなく、何の目的で付けたのかはわかっていません。この鴟尾の製作時期は、鱗部の先端が段になっていることなどから七世紀後半、すなわち大津宮の頃と考えられています。

しかし、大津宮の建物の屋根は瓦葺ではなく、板葺か檜皮葺と考えられており、大津宮

に深く関わった南滋賀町廃寺や穴太廃寺では、異なったタイプの鴟尾が出土していることから、大津宮やそれに関連する寺院の屋根を飾るために造つたとはいえないのです。また、山ノ神遺跡が位置する旧栗太郡の大津市瀬田地域や草津市域にも、多くの白鳳期の寺院跡が確認されていますが、そのいずれからも同系の鴟尾は見つかっていません。いったい、この鴟尾はいずれの建物の屋根を飾るために造られたのでしょうか。謎の多い遺物といえます。

（館長 松浦 俊和）

四号窯（新）鴟尾出土状況



大津歴博だより No.59  
平成17年7月5日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077) 521-2100  
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>